

Institute for Language Education
Aichi University, Nagoya

Boken News

No. 7 July 2002



夏のExmouth。春季英国セミナーが開催されたExterから車で一時間程のところにある港町。

CONTENTS

- オクスフォード文学散歩
(安藤 聡) 2
- 《質問》という名の教師の宿題
(鄭 高咏) 4
- PARIS WEEKENDS
(ジョン・ハミルトン) 6
- ベルギーの言語と文化
(平尾 節子) 10
- 『映画「アモーレス・ペロス」が描くメキシコシティ』
(丸谷雄一郎) 12

◆ 外国語コンテスト 15

- ドイツ語部門
 - フランス語部門
 - 中国語部門
 - 韓国・朝鮮語部門
 - 日本語部門
 - 日本語コンテスト入賞作 17
- 第1位 日本語からみた日本人
(現代中国学部1年 李 成海)
- 第2位 日本の女性 (経営学部1年 易 華)
- 第2位 日本のホームレス
(現代中国学部1年 李 亜坤)

オクスフォード文学散歩

経営学部
安藤 聡

今年度から夏期イギリスセミナーの開催地がオクスフォードに変わった。そこで今回は、この大学町に縁のある文学者たちの足跡を訪ねてみたい。なお、ご存知の方も多いと思うがオクスフォードの街のどこを探しても「オクスフォード大学(Oxford University)」は見つからない。オクスフォード大学とは、街中のあちこちに点在する35の「コレッジ(College)」の総称なのである。創立800年以上になるオクスフォード大学は、これまで数多くの優れた詩人、小説家、劇作家、それに文芸批評家などを輩出してきた。そのすべてをここで取り上げるのはもちろん不可能であり、これから挙げるのはごく一部に過ぎない。

ルイス・キャロル(1832~98、本名チャールズ・ラトウィジ・ドジスン)の『不思議の国のアリス』は主人公アリスが姉と共に川べりで静かな午後の時間を過ごしている場面から始まる。このアリスは19世紀中頃のオクスフォードに実在した少女アリス・リデルをモデルに書かれており、当時30歳だったドジスンが当時11歳のアリスをかなり本気で好きになってしまい、その報われない恋の痛みを昇華させたのがこの作品であると言われている。その頃ドジスはオクスフォード大学で最も有名なコレッジのひとつであるクライスト・チャーチの特別研究員・講師であり(専攻は数学・論理学)、アリスはクライスト・チャーチの学寮長ヘンリー・リデルの次女だった。『不思議の国のアリス』の冒頭の場面はクライスト・チャーチの傍らを流れるテムズ川(オクスフォード界限ではアイシス川と呼ばれる)を念頭に置いて描かれている。そもそ

もこの物語はドジスンがリデル家の三姉妹をつれてこの川で舟遊びをしているときに、アリスにせがまれて彼女を主人公にした荒唐無稽な話を即興で語り聞かせたことに始まっている。この舟遊びは1862年7月4日のことであり、この時彼らは川を数マイル遡ったゴドストウという小さな村まで行っている。ここにはゴドストウ・ナナリー(女子修道院)の廃墟と水門、それに「ザ・トラウト・イン」というパブがある。またクライスト・チャーチの正門の斜向かいには当時アリスらが菓子などを買いに行っていた萬屋があったが、これは現在「アリスの店」というキャラクターグッズなどを売る店になっている。『不思議の国のアリス』が創られた頃のドジスンとアリスの実話を映画化したのが『ドリームチャイルド』である。

英国の後期ロマン派を代表する詩人 P. B. シェリー(1792~1822)は1810年にオクスフォード大学ユニヴァーシティ・コレッジに入学している。このコレッジはハイ・ストリート沿いにあるが、広大な敷地を持つクライスト・チャーチと比べると幾分小さなコレッジである。革命精神に満ちた若き日のシェリー(尤も29歳で夭折しているが)は入学後一年足らずのうちに、「無神論の必要性」‘The Necessity of Atheism’ という小冊子を学友 T. J. ホッグと二人で書いて配布したため、ホッグ共々除籍処分になっている。ついであるがゴシック小説『フランケンシュタイン』の作者メアリ・シェリーはこの詩人の妻である。

トマス・ハーディ(1840~1928)の小説『日陰者ジュード』はケイト・ウィンズレット主演の映画『日陰のふたり』の原作としても知られているが、この小説に登場する架空の街クライストミンスターはオクスフォードをモデルにしている。ウェセックスの小村で生まれ育ったジュードは、地元の女アラベラに押し切られて結婚するがうまく行かない。妻が幼い息子を連れて出ていった後、彼は牧師になるために大学入学を夢見てクライストミンスターへ行き、石工として貧しい生活を送る。彼はこの地で従妹のスーと偶然出逢い恋に落ちるが、アラベラの存在を知ったスーは別な男と結婚

することになる。しかしながら恋愛感情を持たない夫との生活を嫌悪したスーは、ジュードの許に来て同棲生活を始めてしまう。ふたりは当時の英国社会の倫理観からすればとんでもない「日陰者」ということになる。ケイト・ウィンスレットはこのスーの役を好演している。

『ライオンと魔女』に始まる全7巻の長編ファンタジー『ナルニア国年代記』の作者 C. S. ルイス (1898～1963) はモードリン (Magdalen)・コレッジの特別研究員 (専門は中世・ルネサンス期の英文学) として生涯の大半を過ごしたが、夕刻にはしばしばセント・ジャイルズ通りにあるパブ「ジ・イーグル・アンド・チャイルド」に通い詰めていた。ここに集ったルイスの文学仲間の中には『指輪物語 (ロード・オブ・ザ・リングズ)』の作者でオクスフォード大学の教授でもあった J. R. R. トールキン (1892～1973)、オクスフォード大学出版局の要職にあつて優れた詩人・小説家でもあったチャールズ・ウィリアムズ (1886～1945) らがいた。彼らはこのパブを「ザ・バード・アンド・ベイビー」と呼んでいたらしい。ルイスらはいつも暖炉の前の特等席を陣取っていたが、今ではこの席から見える壁に彼らの写真が飾られている。イーグル・アンド・チャイルドからセント・ジャイルズを中心街の方向に少し戻ったところにランドルフ・ホテルがあるが、ここはルイスがアメリカの女流詩人ジョイ・デイヴィッドマンと初めて会った場所である。夫と離婚して息子連れ英国に渡ってきたジョイは帰化を希望するが永住権が得られず、同情したルイス (当時50代後半で独身) はジョイとその子供に永住権を与えるために彼女と「書類上の」結婚をする。やがてジョイは不治の病のため残り3ヶ月の命と宣告される。この頃ふたりの間には書類上の夫婦関係だけでなく自然な愛情が芽生えるが、ルイスの献身的な看病のためもあってジョイはそれから1年半生き延びた。と、ここまで読んで、このストーリーをどこかで聞いたことがあると思った人は映画『永遠の愛に生きて』を観た人でしょう。この映画でルイスを演じていたのはアンソニー・ホプキンスだった。ランドル

フ・ホテルで会う場面は実際にこのホテルで撮影されたが、本当は彼らはホテルのティー・ラウンジで待ち合わせていたのだが映画ではそのとりにあるレストランで待ち合わせていた。それから実際のところはジョイと最初に会ってから結婚するまでの間にルイスはケインブリッジ大学に転勤しているのだが (ケインブリッジでも偶然モードリン・コレッジに所属していた。ただしこちらは 'Magdalene' と綴る)、映画では最後までオクスフォードに勤務していた。それからどうでもいいことだが映画の中でオクスフォード駅とされている駅は実はどこかよその駅であつて、現在のオクスフォード駅には当時の面影は全くない。



詩人ルイス・マクニース (1907～63) はマートン・コレッジの出身である。未完の自叙伝『The Strings Are False』にはここでの学生時代の思い出が綴られている。トールキンもまたこのコレッジの特別研究員・教授を長く務めた (専門は古期英語)。トールキンは作品の中で 'dwarf' (小人) の

複数形を‘dwarves’と綴っていたのだが(正しくは‘dwarfs’)、ある時このことを編集者に指摘された。この時編集者はこの英語学の大家の誤りを発見して鬼の首でも取ったかのような気分になり、調子に乗って「嫌だなあ先生、OED (Oxford English Dictionary) くらい引いて下さいよ」とか何とか言ったらしいが、トールキン先生は憮然として「OEDを書いたのは俺だ」と切り返したという。確かにトールキンはOEDの編纂者に名を連ねている。そして『ホビットの冒険』や『指輪物語』があまりにも広く読まれたために、今では多くの辞書が‘dwarf’の複数形として‘dwarfs’と‘dwarves’の両方を認めている。なお、関係ないが日本の皇太子が留学していたのもこのマートン・コレッジである。

オクスフォードの街を遠くから眺めるとコレッジや教会の尖塔 (spires) が林立しているのが見える。黄昏時のこの眺めを「ドリーミング・スパイアーズ」と謳ったのは詩人・批評家のマシュー・アーノルド (1822~88) である。アーノルドはベイリオル・コレッジ出身であり、在学中に学生が書いた優れた詩に対して授与される「ニューディゲイト賞」を受賞している。卒業後はオリエル・コレッジの特別研究員として、教育学と詩学の分野で活躍した。

と、このようにオクスフォード大学は優れた文学者を大勢育てているのである。しかしながら、ジョン・ミルトン (1608~74)、トマス・グレイ (1716~71)、S. T. コウルリッジ (1772~1834)、そしてウィリアム・ワーズワース (1770~1850) など、英文学史上に燦然と輝く大物が皆ケインブリッジ大学出身なのは何故だろう。

《質問》という名の 教師の宿題

法学部
鄭 高咏

教室でよく質問を受けることがある。その場で答えられない場合は、私の宿題となるのだが、この場を借りて、その中の一部を紹介したい。

質問1：“买东西”の由来は？

中国語で“買い物”は“买东西”であり、決して“买南北”とはいわない。この“买东西”という言葉の語源をみてみよう。

一説によると宋代の著名な哲学者、朱熹の逸話に由来するという。ある日彼は街でかごを手にした親友の盛温如と行き会い、「どこへ行くのだね。」と尋ねた。「“去买东西”(買い物に行く)」との返事に、「“买南北”と言ってもよいではないか。」と朱熹が疑問を発すると、盛温如は答えていわく、「相生相克の理論で森羅万象を説く五行説に基づいているのだ。五行とは金・木・水・火・土であり、これに東・西・南・北・中の方角を当てはめると、東は木、西は金となり、金や木といったものはかごに入る。しかし、南は火、北は水となり、火も水もかごには入れられない。だから“买南北”とは言わないのだ。」

また清代の壘焯という学者によれば、この語の由来は後漢にまでさかのぼる。当時は商人が東の都洛陽と西の都長安に集中しており、この東西の都へ買い物に行くことを“买东”、“买西”と叫んだ。そして時がたつにつれ、“东西”は「品物」の代名詞となり、“买东西”という言い方が生まれたのである。

質問2：医者“大夫”、“郎中”というのはなぜ？

中国の北の方では医者のことを“大夫”といい、南の方、特に農村では“郎中”というが、この呼

称は1000年以上前の、唐代に続く五代の時代(907~960年)にまでさかのぼる。

当時、政治は腐敗し、戦乱が相次いでいたが、支配階級の間人たちは贅沢三昧、官職を売り飛ばしては私腹を肥やしていたため、巷には官職の肩書きがあふれた。そして人々の間では官職名で呼び合うことが一般化し、読書人を“相公”、手に職を持つ者を“待詔”、お茶売りを“茶博士”、質屋の店主を“朝奉”、金持ちを“員外”、“宜敬”、“奉齋”などと呼ぶようになった。世のあらゆる職業に官職名が付けられたといっても過言ではない。

こうした中、皇帝から貧民まで、誰もが世話になる医者是非常に尊敬されていたため、高い官位の“大夫”、“郎中”と呼ばれるようになった。ただし、医者“大夫”と呼ぶようになったのは、正しくは宋代(960~1279年)からである。

宋の時代、中国の医療制度と医学管理は大きく発展し、医療行政を担当する官職が数多くあった。翰林(注:唐代以後に設けられた官庁)の医院に所属する医官は7階級に分けられ、官職も“和安大夫”、“成和大夫”、“成全大夫”といった具合に22種類も設けられていた。かくして“大夫”は医者の正式名称となり、今日に至っているのである。

質問3:「中国」と「中華」のいわれは?

「中国」という語は周代の文献が初見であるが、「中」の字はこれ以前の甲骨文にも既に見られる。その字形は旗の形に似ているのだが、商王は旗の下で会議を開き、人々は旗を囲んで王命を承っていたことから、「中央」の意味が派生した。『詩経』や『礼記』には「中国」という語が記載されているが、当時この語には二つの意味があった。一つは「都」、もう一つは華夏族(漢民族)の居住地域とその国家である。このころ華夏族は黄河の中流域一帯を版図とし、現在の陝西や河南に都を置くのが一般的であり、“四夷”(羌・戎・狄・蛮などの民族)の中央、あるいは“九州”(冀・兗・青・幽・并・揚・荆・豫・雍の九つの州)の中央に位置していたため「中国」と称した。秦・漢以後、「中国」の語は民族や中原地域の枠を超えて政権の別称となり、19世紀中葉以後は中国全土を指す

ようになった。この通り、中国が自ら「全世界の中心の王国」をもって任じているという見解は正確さを欠くものである。

中華の「華」は、漢民族の祖先が「華夏」と自称したことに由来し、「華」は「鮮やか」、「夏」は「大きい」という意味である。孔穎達が記した『尚書』の注釈には“中国有礼仪之大故称夏、有服装之美谓之华”(中国はその礼節の偉大さゆえに夏と称し、その衣装の麗しさゆえに華という)とある。実際には、漢民族と羌・夷・戎・狄・苗といった各民族が融合して形成されたのが初期の華夏族であったが、この呼称は秦代には秦人、漢代には漢人、さらに唐代には唐人と、時代とともに変化した。近代に生まれた「中華民族」という概念は中国の諸民族の総称である。



PARIS WEEKENDS

法学部
JOHN HAMILTON

Autumn Visit

Recently I have spent two weekends in Paris. The first one was from September 8th to the 12th, 2001. It is easy to remember because it was the weekend of the attack on the World Trade Center in New York which I watched on French television.

Actually this weekend began with a shock for me - before the bigger shock in America. At ROISSY CHARLES DE GAULLE AIRPORT my passport, my money and my cheque book and cards were all taken by a pickpocket. I felt so foolish. Usually when I travel in China I am very careful about this kind of thing. I keep my precious things in inside pockets or trouser pockets half way down my legs, and I never have any problems there. In fact people in China may be poor but they are honest in my experience. But France is so close to England. It doesn't seem like going to a foreign country ... and I broke all my own rules and took no precautions. There was one immigration guichet open for 300 people. I showed my passport and hurried through carrying two bags, both hands full. Suddenly I realised my pockets were empty.... At the police office where I reported the theft, they said that gangs of pickpockets operated all the time. There were

depressed looking young black people sitting on the floor of the police office. The atmosphere was not good. This was my welcome to France.

We stayed in the apartment of friends at 42 Quai d' Orleans on ÎLE ST-LOUIS three floors above the most famous icecream shop in Paris. The sign outside said "Glaces et Sorbets de la Maison Bertillon" and the icecreams were quite delicious. We were visiting Mark Hamilton who was staying in a chambre de bonne upstairs. The apartment was beautifully decorated in French style with a Chinese mural on the wall of the dining room which looked like a picture of the lake at Jehol, today's Chengde 承德 north of Peking. There was an architecture student Thomas St Yves staying in the flat who was very keen on the work of Japanese architects Tadao Ando, Tetsuo Se-



The fashionable drink among students in Paris at the moment

jima and Shigeru Ban. He introduced me to 'Martini on the rocks' which he said was the favorite drink among students in Paris. It has been my favorite drink since then. There was also a girl called Jasmin Areliano visiting from Chicago. Her father was Mexican and mother Lebanese. It seems that these days half the population of Chicago speaks Spanish. (In Chicago you can take your driving test in Spanish, I was told later.) The windows of the apartment looked out onto Notre-Dame which is the most extraordinary building; sometimes it seems like a huge insect, sometimes like a rowing boat, in the mornings we were woken up by the great bells..... echoing along the quais. We walked out and visited the 'Mémorial de la Déportation' below the apartment. It is a memorial to French Jews who were deported to concentration camps during the war. "PAR-DONNE.....N'OUBLIE PAS....." was written on the wall. And from there we took the rue de Bièvre where President Mitterrand used to live, up into the Latin Quarter. I had to go to the British Consulate in the rue d' Anjou to get a replacement passport which I needed to get back to England and a day or two later return to Japan. The British Consulate gave me very good service. They faxed my application and photograph to Peterborough in UK and two days later the new passport was ready. After the September 11th attack in New York I needed the passport to get back into England.

On the Sunday we visited a cousin, Kate de Montjoie, in Suresnes behind the Longchamps racecourse. We had a very good dinner by candlelight. The cheeses - Tomme de Savoie and Reblochon de Savoie were quite delicious as was the Sorbet so much so that I copied down the recipe.

PÊCHES ET GRANITÉ AU BEAUMES DE VENISE (for four)

Le granité: 1/3 de litre de beaumes de Venise,
100g de sucre semonte

Les pêches: 4 pêches blanches et jaunes, 1 citron
jaune non traité, 1 brin de thym frais, quelque
grappe de groseilles

Préparation: 5 minutes Cuisson: 7 à 8 minutes

Le Granité. Verser dans une cocotte 2.5 dl d' eau, ajouter le sucre, porter à ébullition, et lorsque le sucre est fondu, laisser cuire encore 5 minutes à feu doux. Retirer du feu, laisser refroidir, ajouter les beames de Venise, mélanger, verser la préparation dans un bac de glace, mettre au congélateur et laisser prendre les pêches. Couper les pêches en lamelles, les mettre dans un saladier, raper au dessus le zeste du citron, exprimer son jus, en verser 2 cuillerées à soupe sur tes fruits, remuer et mettre au frais pour au moins une heure. Au moment de servir, répartir les lamelles de pêche dans des coupes, ajouter au granité quelque groseilles et un brin de thym.

We were driven back from Suresnes by Henri de Montjoie. Along the quais we passed the place where Princess Diana had hit the pillar and been killed really not so long ago (a breathtaking way to go.) The following day we visited Kate again, this time at her work in La Défense. She is responsible for among other things the art collection of the bank Société Générale. In fact we were up on the 35th floor looking at art works when the attacks took place in New York. 35 floors seemed quite high enough to me. We had wondered how we would get out if there was a fire.

Spring Visit

(for Odette Barral's 80th birthday party

She is still 23 !)

We visited Paris again over the Easter weekend (March 31st to April 4th.) This time Roissy Charles de Gaulle Airport was quite civilized. The 1960s modern architecture of the airport is very interesting. We took the bus in to Porte Maillot and walked up Avenue de la Grande Armée to the apartment where we were staying. The party had not been kept a secret but the birthday lady didn't know we were coming. We stayed the first night with one of the daughters Marie Anne. She was actually not there when we arrived but on her way back from a tennis tournament in Grenoble, so her husband took care of us. Marie Anne is a banker and has worked for Banque Nationale de Paris for a long time. As in Japan, banks in France are consolidating. Recently BNP merged with Paribas, so she is working on the BNP side of the BNP - PARISBAS MERGER which is quite a job. "It is difficult to pay their salaries," she said. I sensed a battle in progress. After these mergers there is always a blood-bath. It is called 'restructuring.' (A merchant banker friend in England aged 52 was recently fired by a 26 year old girl.) While waiting for her to come back I watched the television news. Israel had just attacked Ramallah on the West Bank. Chirac in an interview was saying that Israel would never win security by force and I agreed with that. The Presidential election in France was in full swing. At that time it looked as if Jospin was going to win, but nobody was very interested. We were to get a surprise a few weeks later.

The BIRTHDAY PARTY was a lunch on

Easter Monday. Since the birthday lady had had 9 children and we knew all of them, and now all of them were married some more than once, and had their own families, it was great fun for us. I always enjoy speaking French which I do very badly, though it improves as I drink more wine. (Sometimes in France I find myself speaking Japanese!) It was a beautiful day. The garden on the edge of the Parc de Sceaux was full of flowers. A blonde girl was lounging with her black boyfriend on the balcony of a flat across the road... Before lunch I went with one of the sons to the boulangerie in Sceaux to collect about 50 warm baguettes which had been ordered before. Carrying the warm baguettes was like carrying a warm baby. Paris was looking good. Since the great storm went through France a year or two ago, lots of young trees have been planted, and now they are all beginning to look nice. At the lunch I was seated between an artist called Topsy and a fellow 80 year old called Alain Philippe.

That night we stayed with a daughter-in-law Caroline in a flat in Place de Mexico in the 16th. It was on the fifth floor and the lift was not working so we had to be careful not to forget anything when we went out. She had three daughters, Emmanuelle, Sabine and Quitrie and two golden labradors Lena and Gali. We took the dogs for a walk down to the Benjamin Franklin Park which is a dog's loo opposite the Trocadéro. IT WAS SO EXCITING WALKING WITH DOGS THROUGH PARIS. I really felt at home.

The following evening we dined with Alix, another daughter. and her husband Marc, near the metro station Boulogne Jean Jaures. Both of them were ear nose and throat doctors. Marc's father had been a vet in Chad (Chad is 6 times the size of France) so he had been

brought up there. He had done his service militaire as a doctor in Brazzaville. That day was Marc's "JOURNÉE CÉLIBATAIRE" but because we were visiting he came and joined us. Their house was very nice. It had a secret attic concealed behind a bookcase. It was the kind of place where the resistance might have had a radio during the war. There was a plate on the dresser, brought back by Marc's grandfather from China, dating from the mid 19th century maybe, and maybe from Jingdezhen 景德镇 - and on it was an inscription in Chinese. I copied it down but so far I have not been able to find anyone Chinese or Japanese who can translate it. Here it is:

生伏

天	帝	火	十	老
堃	王	石	余	夕
石	典	床	曹	士
非	莫	去	素	九

At dinner Alix was asking why England did not join the Euro. "You can't live next door and not participate," she said. "ARE YOU WITH AMERICA OR WITH US?" "We feel that the British stay out in order to become rich on our back." It was interesting to hear these comments although I don't see things in quite the same way.

We were driven back across the Bois de Boulogne to where we were staying. On the way we saw lots of ladies of the night ('poules de luxe') waiting to be picked up. Many come from Poland and the Ukraine these days I was

told. It was good to be in Paris again.

REFLECTIONS.

My difficulties at Roissy Charles de Gaulle were food for thought. The airport is at the interface between developing and developed worlds. Lots of people from North Africa and West Africa want to come and live in France. Indeed the European Union is also besieged from the East as well. Maybe some lucky man is now using John Hamilton's passport in England, and had enough money to get through the first few weeks with his family. Good luck to him!

After these visits, LE PEN, the extreme right wing candidate, came in second in the first round of the French Presidential election ahead of Jospin. If the French electorate had been a little more lazy he might even have won..... Recently George Bush in America won the Presidential election by a very narrow margin in the Florida recount. Both America and France are mature democracies. But both results make me anxious that in the future really dangerous people could by chance become political leaders. The democratic system can go wrong just by chance... This time was just a warning.

It was good to have a glimpse of life in France after a long interval, and to see friends, and members of a big family, and how they were all getting along. Some had been out of work for a long time, some had divorced and remarried, or not yet remarried, but they were all surviving with sense of humour intact. The food and wine was delicious. They have beautiful children - though not quite so many as in the previous generation. Young lovely trees are coming up to replace those swept away by the hurricane.

ベルギーの言語と文化

法学部
平尾 節子

ベルギーの魅力は何であろうか？

ベルギーは、華麗な中世文化の息吹きを伝える国である。その美しく、平和で、活気に満ちたベルギーの都市や田園のたたずまいの背後には、苦難の歴史がある。「ベルギーの人々には、苦難に耐えた勇気と、未来に挑戦する強い意志や、英知が秘められている」、「ベルギーの首都、ブルッセルは、‘Center of Europe’ (ヨーロッパの中心) である」と、日本ベルギー大使館、French Community の大使代理の Jean-François Delahaut 氏は誇らしげに語った。また、Flemish Community の David Maenhout 氏は「ベルギーは、ドイツ、フランス、オランダと国境を接し、ドーバー海峡でイギリスと通じている。ヨーロッパの Crossing Road (交差点) であり、ヨーロッパの Heart (心臓) である」と、言われた。

ヨーロッパの中心、ヨーロッパの心臓であると称せられるベルギー・ブルッセルには、ヨーロッパ連合 (EU) 本部がある。

筆者は、2000年3月、SIETAR (Society of Intercultural Education, Training, and Research) 学会世界大会で、研究発表を行った際に、EU 本部を訪問し、EU の言語教育について調査・研究をする機会を得た。その一端を「Goken News No. 5: EU の語学教育—ヨーロッパ言語年 2001—」で紹介した。今回は、ベルギーの魅力をかぐってみよう。

ベルギーの概要

国名：ベルギー王国 Kingdom of Belgium

面積：30,519km² (九州よりやや小さい)

人口：1,016万人

首都：ブルッセル

民族：フラマン人 (北部、オランダ語系) 55%

ワロン人 (南部、フランス語系) 44%

言語：公用語は北部でオランダ語、南部でフランス語、0.6%がドイツ語

宗教：キリスト教 (カトリック90%)

政体：立憲君主制 (連邦制)

元首：アルベール 2 世国王

独立：1831年7月21日

EU 議長国：1993年

ベルギーの歴史

ベルギーはローマ帝国時代、フランク王国時代、中世の封建時代を通じ、世界的な交易上の拠点として古くから文明の開けた地方であった。特に、11世紀以降は東方交易が盛んになり、北イタリアなどとともルネッサンスの文化および産業貿易の勃興の中心の一つとなった。しかし、15世紀以降はフランス、オーストリア、スペインなどの周辺の強国の支配を受け、苦難の時代を送る。オランダ統治下の1830年、ブルッセルでの反乱を機に暫定政府が樹立され、翌1831年、立憲君主国となる。1839年、永世中立国となるが、第1次世界大戦後却下する。民主的な立憲君主国で、実際の行政権は内閣に委ねられている。

第2次世界大戦後、ブリュッセルはヨーロッパ統合の中核としての国際的役割を担うようになった。ヨーロッパ連合 (EU) 本部、ヨーロッパ議会、ヨーロッパ委員会、北大西洋条約機構 (NATO) 本部などの国際機関の本部が設置され、国際ビジネスのヨーロッパにおける中心地となる。GNP は自由主義世界でも豊かな国の一つで、EU 平均を常に上回っている。

ベルギーの言語

ベルギーは、多言語国家である。「スリにご用心」の注意書にも、上から、オランダ語、フランス語、ドイツ語、英語で、記されている。

ベルギーの国情の最大の特徴は、フラマン人(オランダ語を話す)と、ワロン人(フランス語を話す)の2言語国民、およびドイツ語系の国民で構成されている点にある。北部に多いオランダ語を話すフラマン人は、ゲルマン的特性から、質実剛健、忍耐強い。南部に多いフランス語を話すワロン人は、ラテン的特性で独立心が強く、楽天的であるとされる。

ベルギーの公用語は、オランダ語とフランス語の2言語である。ブルッセル首都圏では、80%がフランス語、20%がオランダ語を話す。国民の11%が両方を使用でき、大多数が英語を駆使する。

ベルギーの語学教育

ベルギーは、フラマン語(オランダ語系)圏と、フランス語圏およびドイツ語圏とに分かれている連邦制国家である。教育制度は、フラマン語圏とフランス語圏・ドイツ語圏と異なっている。フランス語圏とドイツ語圏の教育制度はほぼ同じである。教育行政も、フラマン語圏教育省と、フランス語圏教育省と分れている。

2001年3月、筆者は、両教育省を訪問し、各々の小・中・高・大学、計8校を訪れる機会を得た。EUの言語政策である「1+2」すなわち「母語プラス外国語2ヶ国語」の言語教育が実施されている実態を参観することができた。つまり、小学校第3学年から、母語であるオランダ語(フランス語、またはドイツ語)を習得するとともに、第2言語(フランダース地方では、フランス語、ワロン地方では、オランダ語、ドイツ地方では、フランス語)を選択する。さらに、小学校第5学年から、外国語としての英語を学習している。

1425年、世界最古のカトリック大学として創設されたルーヴェン・カトリック大学の英語教育学では、target languageである英語を用いて、講義、プレゼンテーション、ディスカッションが展開さ



グランド・プラス広場〔王の家〕Maison du Roiの前にて

れていた。

ベルギーの文化

ベルギーには、ゲルマンとラテンの文化がたくみに調和していると言われる。

首都ブルッセルのグランド・プラスは、ヴィクトル・ユゴーが、「世界で最も美しい広場」と賞賛した広場である。広場正面には、市庁舎(左)、ギルド・ハウス(中央)、王の家(右)などの歴史的建造物があり、その華麗さ、荘厳さに魅了されてしまう。

市庁舎(14C)の塔は、ベルギー特産の手編みレースを連想させるような繊細で緻密なゴシック装飾でおおわれている。ギルド・ハウス(17~18C)の壁面には、金箔が燦然と輝き、ベルギー独特のバロック的絢爛・豪華な装飾である。ベルギー建築の感性は、タピスリー織りや、ダイヤモンドのペ

ルギー・カットと無縁ではないかもしれないと思われた。

1880年のベルギー建国50周年を記念するサン・カントネール宮殿入り口にある凱旋門を夕刻に訪れたが、緑色にライトアップされて、息をのむ美しさであった。

グランド・プラスの北東の丘の上には、13C建立のサン・ミッシェル大聖堂がある。昨年、ベルギー王室のフィリップ皇太子の結婚式が行われ、皇太子と雅子妃も出席された。大聖堂の内部には、前国王の結婚式当時の現天皇・皇后列席の写真の拡大パネルが、飾られていた。

京都・祇園祭の鶏鉾の重要文化財になっているゴブラン織りのタピスリーは、トロイの王子、ヘクトルが妻子に別れを告げる場面が織られているが、16Cにベルギーで製作されたものであるという。

「フランダースの犬」のいわれなど、ベルギーと日本との友好関係が色濃く感じられた。

ベルギーの言語教育に関する調査・研究で、レクチャーをして下さった French Community 教育省の Dr. André Bayen は、ベルギーの色とりどりのチョコレートは「食べる宝石」であるとか、ベルギー・ビールの個人消費量は、世界一で、種類も800種類に及ぶなど、ユーモアを交えた説明もして下さった。学校訪問スケジュールやレクチャーの手配をして下さった Flemish Community 教育省の Mr. Gaby Hostens が、東京で開催された G8 教育大臣会議「G8 教育サミット」に出席されたと聞いて、感動、感激が連続したベルギー訪問であった。

『映画「アモーレス・ペロス」 が描くメキシコシティ』

経営学部
丸谷雄一郎

「アモーレス・ペロス」は2000年のカンヌ映画祭批評家週間グランプリを獲得し、東京国際映画祭でもグランプリを受賞した。監督は新人のアレハンドロ・ゴンザレス・イニャリトゥであり、ラジオ局の人気DJからCM監督を経て初メガホンとなった。

映画は導入部分と3つのエピソードの4部構成である。導入部分は3つのエピソードを結びつける役割をしており、3つのエピソードの主人公達が登場するカーチェースシーンとなっている。若者と血まみれの犬をのせた車は追跡されており、追跡車を振り切ったかに見えたその瞬間に別の車に接触し、事故を起こす。

事故に関わる3つのエピソードが以下では描かれる。エピソード1はこの事故の加害者であるオクタビオと義理の姉スサナの物語である。スサナは兄と望まぬ妊娠の結果結婚し、たびたび暴力を振るわれている。オクタビオは義姉スサナを愛しているため、兄の仕打ちに耐え切れず、姉に駆け落ちを持ちかけ、その資金調達のために、兄の犬を使って闘犬で荒稼ぎをする。オクタビオとスサナは結ばれ、駆け落ちを決めるが、結局、犬は闘犬中に銃で撃たれ、スサナは兄のもとへ戻る。オクタビオは犬を撃ち殺した相手をナイフで刺し、彼らの仲間に追跡され、導入部分のカーチェースの部分へと結びつく。

エピソード2は事故の被害者であるスーパーモデルのパレリアの物語である。彼女はこの事故まで仕事も恋も順調であった。仕事は一流ブランドとの契約を獲得し、不倫相手の広告デザイナー、

ダニエルは妻と別居を決めた。ダニエルが彼女に二人で住む予定のマンションを見せ、彼が買い忘れたシャンパンを彼女が買いに行く途中で、事故は起こったのである。彼女は重症だったが一命をとりとめ、車椅子姿のまま退院する。そして、二人のマンションで彼女の愛犬リッチーとの3人暮らしが始まった。そんな矢先、リッチーが自宅の床の穴に落ちてしまう。情緒不安定な彼女は彼と会えば口げんかを繰り返す、完治していない足で床をたたき、リッチーを探す。結局、リッチーは彼に助けられるが、彼女の足は切断を余儀なくされるのである。

エピソード3は事故を目撃し、救助した殺し屋エル・チーボの物語である。彼は大学教授であったが、反体制運動に参加した結果投獄され、現在は殺し屋となっている。事故当日は仕事を依頼され、ターゲットの尾行中であつた。ターゲットは依頼者の兄であつた。結局、彼は依頼者とターゲットの双方を縛りあげ、依頼者のスーツや車を奪い、昔捨てた娘の家に忍び込み、貯めた金を娘に与えるためにおいて、姿を消すのである。

この映画はメキシコシティの社会階層という観点からみると非常に興味深い。舞台となったメキシコシティはアステカ帝国に遡る世界遺産にも指定される伝統的な大都市であり、時代を経るごとに地方からの人口を吸収し、現在では2000万人を超えている。こうした発展はこの映画で示される階層の格差を形成した。

メキシコはスペイン移民の末裔である富裕層と比較的早い時期に流入した人々から構成される上層階層と都市の拡大に伴って地方を追われるように流入した下層階層という2つの階層に大きく分けられる。そして、下層階層は1982年以降の新自由主義経済への移行を経て増加傾向にあり、中間階層の多くが下層へ近づくことで近年2つの階層への集約が鮮明になってきている。こうした階層は日本では認識しづらいかもしれないが、階層意識は世界的にみると一般的である。メキシコシティは時間をかけて形成された都市だけに、さまざまな階層が隣接し、交錯することになったのである。

映画はそうした複雑な階層社会の関係を興味深く描いている。

エピソード1では典型的な下層階層の生活を示している。ここで描かれる家族はスーパーマーケットの従業員である兄の収入等で生活している。彼らはその日の食べ物に困るというレベルの生活ではないが、上層階層の豊かな生活が近くにあるという世界の大都市でみられる風景の中で常に金への憧れを頂いている。

エピソード2では典型的な上層階層の生活を示している。主人公はスーパーモデルであり、その周りの人々もマスコミ業界の人物であり、彼らは先進国と変わらないおしゃれな生活をしている。シャンパンでお祝い事を祝い、ペットを飼い、高層のマンションでアーバンライフを過ごしている。

エピソード3は上記の2つのエピソードとは趣が異なる。主人公の老人は大学教授という上層階層から殺し屋という下層階層へドロップアウトしており、下層階層の生活をしながら、上層階層の依頼者や娘と接している。

おそらく、監督はエピソード1では金への執着、エピソード2では物質以外のものへの欲求、エピソード3ではそれぞれの階層の隣接性を描いているのである。そして、この隣接性こそが大都市メキシコシティの特徴であり、その活力の源になっているのである。

また、この映画のタイトル「アモーレス・ペロス」は直訳すると「犬のような愛」であるが、それぞれのエピソードでの犬の使い方が各階層の特徴を示している。エピソード1では闘犬という収入を得る手段として描かれている。エピソード2ではペットという豊かさの象徴であり、愛すべき対象として描かれている。エピソード3では双方の性格を持つ犬が混在し、最終的にはペットとしての犬が闘犬に全て殺されてしまうという結末を迎える。まさに、多様な階層の同居の難しさが象徴的に示されているのである。

このように真面目な議論をすると、この映画が小難しい内容のものに捉えられてしまうかもしれない。しかし、この映画は決して難しい内容の作

品ではなく、監督のDJからCM監督といった経歴を反映して、エンターテインメント性にも溢れている。特に、全編に流れる音楽はメキシコの伝統的音楽マリアッチではなく、ロック・エン・エスパニョールと呼ばれるスペイン語のロックであり、画面に臨場感を出している。メキシコ人は音楽好きであり、街には音楽が溢れているが、その多くは決して伝統的な音楽ではなく、米国のロックがラテン風にアレンジされ、独自の進化を遂げたものなのである。

また、どこか土着的な雰囲気も魅力的である。話題を呼んだハリウッド映画「メキシカン」や「トラフィック」もメキシコを舞台にしている。しかし、この映画はこれらの映画と根本的に異なる土着的な雰囲気がある。この映画と比較すると、上記の2つの映画はメキシコの外面的な部分しか捉えていないと感じる。「トラフィック」は筆者も作品的には非常に優れていると思うが、そこで描かれるメキシコはハリウッド映画の粋を出ておらず、当然のことながら、米国人からみたメキシコなのである。社会階層や文化を知ることは語学を学ぶ上で不可欠であると思うが、この映画はそういった意味で非常に優れた題材であるといえる。また、映画を通じて、日本人が意識しにくい階層といった見えない壁の一端を理解できるかもしれない。



第7回 外国語コンテスト

ドイツ語部門

2001年度の名古屋語学教育研究室主催第7回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2001年11月27日(火曜日)におこなわれました。その結果を簡単にですが、報告したいと思います。

今回は、昨年度と趣向を変えて二つの歌を課題に選びました。参加者は、シューベルト作曲の有名なドイツ・リート『菩提樹(リンデンバウム)』と20世紀の初めに女優マレーネ・ディートリヒが歌って有名になった『リリー・マルレーン』のどちらかを選ぶことができるようにしました。

人前で歌を、しかも慣れないドイツ語で歌わなければならないということで参加者が集まるかどうか心配はしましたが、11名の参加者がありました。

その結果ですが、非常にレベルの高いコンテストになりました。採点は、発音・アクセント、そして表現力の合計点で行ないました。今回は、歌ということで表現力のところで差が見られましたが、外国語コンテストであるということを考慮して、まず発音とアクセントが正確であるかどうかを重視しました。

その結果、第1位(優勝)は『菩提樹』を完璧に歌ってくれました榎谷太一君(01J1312)、第2位は同じく『菩提樹』を歌った小島祐樹君(99J1455)、第3位は『リリー・マルレーン』を歌ってくれた木村友紀さん(00J1363)でした。残念ながら入賞できなかった他の参加者も、入賞者と比べて見劣りのない練習の成果を堂々と披露してくれました。これを機会にして、皆さんには、ただ授業のドイツ語を勉強するだけでなく、さまざまなドイツの歌にもぜひ親しんで欲しいものです。

最後に、意欲的な学生の皆さん、語学教育研究

室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげで今回もコンテストを続けることができました、心よりお礼申し上げます。

そして今後さらに質の高いコンテストを行なうために、課題の選び方から実施、審査の方法までまだまだ反省すべき点や改善すべき点は多いいうことをふかく自覚して、次回コンテストに備えたいと思います。

(島田 了)

フランス語部門

第7回フランス語コンクールは2001年11月26日行われ、19名の参加者があった。これまでと比較して平均的な人数である。その大多数は法学部、経営学部の2、3年生であった。

コンクールのテーマはギヨーム・アポリネールの詩『ミラボー橋』を読むこと、できうれば空で朗読することであった。難しいところは多くある。発音やプレゼンテーションに気を配ることの他に、リズムを強調し、詩句のメロディーを際立たせることである。なぜならこれは有名な詩であり、多くの歌手に歌われてもいるからである。

例年どおり、1回目2回目と審査を繰り返して優秀者を選抜していった。初回で7名を選んだが、これは容易であった。学生たちの知識程度が、概して、下位グループとの間ではっきりしていたからである。しかし、最終3名を選出するに当たっては、挑戦者間に大きな差異はなく、選考は困難であった。最終的には、立ち会ったフランス語教師3名の相談により、以下のとおり決定した。

第1位 肥田 晴司 (00M3304)

第2位 川北 陽 (00M3314)

第3位 浦川 博明 (00J1277)

本年度もまた、コンクールはよいコンディションと雰囲気のもとで行われたが、これは参加者全員にとっては喜ばしいことであった。

(ラッセン)

中国語部門

第7回外国語コンテスト「中国語部門」は2001年11月22日(木)午後1時から211教室において開催された。例年と同様「現代中国学部部門」と「法学部・経営学部部門」とに分けて実施した。

「現代中国学部部門」では、課題文の暗唱と自らが作文した中国語の文章を暗唱するという内容であった。正確な発音に努める一方、文章の内容をよく理解した上、感情をこめた発表が特徴であった。ただ、昨年と比べ、参加者の人数が少なかったことにさびしさを感じた。一方、「法学部・経営学部部門」では参加者が44名で活気にあふれた熱戦となった。とくに車道の法学部2部からは3名が参加し、しかもその中から第1位の栄冠を勝ち取った学生が現れたということは前例のないことであった。

今後は、教師側からの「過度の働きかけ」によって参加者を増加させるという方向ではなく、学生側からの積極的かつ自主的な参加が切に望まれる。

入賞者は以下の通りである。

「法学部・経営学部部門」(課題文の朗読)

- 第1位 01SJ1002 原田 大輔
 第2位 00M3388 山田 真理子
 第3位 01J1262 奥富 裕一郎

「現代中国学部部門」

- 第1位 00C8006 柴田 幸洋 (自由課題文)
 第2位 00C8017 大崎 綾子 (課題文の暗唱)
 第3位 00C8110 山下 怜子 (課題文の暗唱)
 (鄭 高咏)

韓国・朝鮮語部門

第7回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」の部、本選会は2001年11月22日(木)、名古屋校舎212教室で実施された。本選出場者は、車道校舎からの2名(山口彬・吉田誠両君)を加え、15名。ほぼ全員が、課題テキスト朗読の前後に短い韓国語による自己紹介や挨拶を行っていたのが印象的であった。

審査員の一人、陶山名誉教授が「総評」でも言われたように、上位者のレベルは高く、従って入賞者の選定には今回も頭を痛めたが、結局以下のごとく決定した。

- 第1位 00J1369 水谷 元昭
 第2位 01M3376 宮代 和子
 第3位 98J1327 久野 幹太

入賞なのがしたもの、吉田誠君(01SJ1098)、塚原雅也君(01J1286)、木村恵さん(00M3405)等と、入賞者との差はほとんどないと言ってもよかった。しかし、上位者だけが「関心の対象」というわけではない。毎回言うことだが、むしろ他の学生諸君が、熱心に練習してきて平素の実力をはるかに上回る発表をする時こそ、私達教育者は、「外国語コンテスト」の本来の意義を感じるものだ、ということも知っていて欲しい。

(常石希望)

日本語部門

日本語部門は2001年12月11日、例年のように、外国人留学生によるスピーチコンテストでした。1年生12名、2年生3名の合計15名が全員「留学生が見た日本」という大きなタイトルのもとの、それぞれ自分の身近でおきた小さな出来事から学び取ったことを語ってくれました。そういった小さな出来事は私達日本人には極当たり前のことになっており、ほとんど気にもしないで通り過ぎていくことばかりですが、留学生は敏感にそれら

を読みとり、そこから多くを学んでいる様子が伝わってきました。聞いている者には、異文化を体験するとはこういうことなのだと知らされた思いがするとともに、また、日本というのはこういった側面を持った社会なのかと、あらためて日本を客観的に見つめる良い機会となったと思います。

例年に比べて、今年はスピーチというより自分の体験談に終始したものが多く、その点は少し残念でした。しかし、そもそもスピーチをするのはなかなか大変なことです。それがましてや外国語となればなおさらですが、にもかかわらず、積極的に参加してくれた学生が多くいたことをとても嬉しく思っています。そんな中でも、しかし、入賞者たちのスピーチは主張もはっきりしており、日本の社会、文化を巧みに浮き彫りにしてみせてくれました。この後に記載される学生のスピーチを楽しんで下さい。

(山本雅子)

- 第1位 01C8217 李 成海
 第2位 01M3514 易 華
 第2位 01C8218 李 亜坤

《日本語コンテスト入賞作》(原文のまま)

第1位 日本語からみた日本人

現代中国学部1年 01C8217 李 成海

こんにちは、みなさん！ 私が日本に来て一番最初に学んだ日本語とはこのあいさつの言葉「こんにちは」でした。私の日本での留学生活、日本語勉強というものはこの一言のあいさつから始まりました。

朝学校に行くと「おはようございます」と明るくあいさつ、帰る時は「さよなら」と丁寧にあいさつします。バイト先に行くとまた「おはようございます」と元気よく仕事場の人たちに声を掛けます。バイトを終えて帰る時も「お疲れ様でした」

ときちんとあいさつします。「すみません」、「ごめんさい」、「ありがとうございます」などは一日中で何回言っているか自分でもよく分からないぐらいです。日本語勉強から始まった日本での留学生活、あいさつから始まる日本語の勉強、留学生の方なら多分みんなこういう経験があったと思います。私は「なぜ日本人はこんなにあいさつにこだわってるんだろう」と考えはじめました。

実は日本語だけでなく、英語とか韓国語、中国語などを学ぶことも決して甘いものではないと思います。『言語というものはただのコミュニケーションのための手段であるだけではなく、その民族の文化、あるいは価値観、世界観などに深くかかわっている』という文章をある本から読んだことがあります。その通り、一つの言語を通してはその民族の心理と性格の特徴を覗いて見ることができるのです。普通、日本人は礼儀正しいと言われていきます。きちんとしたあいさつをしているからそう考えられるでしょう。勿論、あいさつに対するこだわりも礼儀正しさを求める日本人の性格特徴の一つだと言えます。しかし、それだけではありません。日本人はあいさつを通して他人に対する自分の心配りを示しているのです。「がんばってねー」短くてもやさしい一言、「ありがとうございます」うれしいけれどそう答えるしかない自分。人と人の心が一言のあいさつによってうまくつながってくるのです。

あいさつのほかにもいろんな事から日本人の性格を覗いて見ることができます。私にはこんな小さな発見がありました。日本人は「ヨイショ」という言葉をよく口にします。朝、ヨイショと言って床から起きあがって、ヨイショと言って伸びをします。顔をごしごし洗ってからヨイショ、出掛ける前もちろんヨイショ。面白いことです。これは日本人独自の少なくとも中国人とか韓国人にはない口くせです。これはなぜでしょう。私は「ヨイショ」というのはある事に対する訣別だと考えます。新しいことを始めようとすれば必ず一旦立ち止まって古い事と訣別しながら新しい事に立ち向かう。そして、自分に新しい事に立ち向かう力、

つまり気合いを入れる。これも日本人独自の性格ではないでしょうか。

このように他人に対する心配りを伝えることも、自分に気合い入れることも言葉を通じて表現できるのです。我々在日留学生にとっても日本語の勉強を通じて日本の文化、習慣、日本人の性格などをもっと深く理解し、言葉のコミュニケーションに基づいて、心と心のコミュニケーションを求めることが留学生活のためにも、自分自身のためにもいいことになるのではないのでしょうか。

コミュニケーションというものは決して一方的なものではありません。だから、来年は日本人学生の方からも「中国語を通して見た中国人」のようなスピーチを発表して欲しいです。日本人が礼儀にこだわっているように中国でも礼儀というものは大切なものであります。いつか中国に行って実際に体験してみなさい。その時、中国の人々たちは千五百年前から伝わって来たあいさつ言葉で歓迎するはずです。

それとは「有明自远方来，不亦乐乎」

第2位 日本 の 女性

経営学部1年 01M3514 易 華

皆さん、今日は。私は経営学部一年生易華と申します。今日は日本の女性というタイトルで話したいと思います。私は話をする前に皆さんに質問したいことがあります。皆さんは幸せのにシンボルとしてどんな image を思い浮かべますか？ ダイヤモンドをつけている rolex を手にはめて人目の中で自分を誇ることでですか？ それともベンツか BMW に乗って都会から自然の中をゆったりドライブ事ですか？ そういうことも幸せかもしれません。でも私の心に一番ぴったりする幸せな姿はアメリカのグリーンカードを持って、ヨーロッパの大きなハウスに住んで、中国の美味しい料理を食べていること。でもそれが幸せに完成するためには日本人の奥さんのような役割を果たす女性が

そこにいなければなりません。日本人の女性は美しく、優しく、礼儀が正しく、家庭に尽くすことで世界中の男性が憧れています。私はそんなことが本当にあるだろうかと言う不思議な気持ちを抱えながら、日本に留学してきました。

戦後日本経済は大きく発展してきました。短時間で豊かな国になりました。このように発展した要因としてはいくつかの言い方があります。アメリカからの援助とか、自分の国では戦争がなく、周辺の国の戦争で経済が刺激される機会があったとか、日本の農村の人が大都会に出て安い賃金でも一生懸命働いて競争力を支えたこととかあげられているのを聞き、そうかもしれないと思いました。でも日本人の女性の役割に触れた話はほとんど聞きません。日本の女性について、私が中国にいた時に聞いたことと私が日本に来て実感したことと大変な違いがあると思います。みなさん、ちょっと考えてください。日本の女性は普通は小学校の五年生頃に、裁縫や料理など身近な生活の技能や知恵など身につけ始めます。学校を卒業して就職しても結婚したら、仕事をやめて、専業主婦になる人が多いようです。男は仕事、女は家庭という役割分担でその生涯を一貫しています。奥さんは主人が起きる前に朝食を作っておきます。昼には家事、育児などをします。主人が帰る前に晩御飯を用意してお風呂を沸かしておきます。このようにして外で働くものが十分力を発揮することが出来、子供のしつけや教育に対しても日常的に行き届いた心配が行われています。家庭全体の大切なバランス維持させることになりそのことが日本の人々の生活を守り、日本が豊かな国になったのを陰で支えたのは奥さん達でもあると言えるでしょう。奥さん達がモノを生産していないということで、そういう奥さん達の役割を小さく評価していいでしょうか？

このような伝統的な女性の生き方に変化が出てきたようです。女性も世間知らずではいけない。もっと社会に進出するべきだという声が高くなりました。日本女性の生き方が変化を生じたのは歴史的な必然のようなものがあつたかもしれません。

これから、時代が発展するに伴い、日本の女性の社会的地位が高くなり、優れた指導力を発揮する人も多くなるでしょう。しかし、日本の伝統的な奥さんたちが果たしてきた役割がただ世界中の男性が憧れるというよりも遙かに重要な意味があるのではないのでしょうか。

私は日本で勉強する一人の外国人女性として、その精神が将来の人々の幸福を作る力をよく考えてみたいと思います。

最後に言いたいことがあります。それは21世紀は女性が人間として生きる時代だと思えます。

以上

第2位 日本のホームレス

現代中国学部1年 01C8218 李 亜坤

何処の国でも自分たちの独特な生活習慣があります。同じ国でも地方や民族によって生活習慣が違います。

たぶん、今ここに居る皆さんにとっても日本へ留学に来る前、自分の頭の中には、日本に対していろいろなイメージがあったと思います。

でも、日本に来てから、自分自身本当に日本の社会の中で体験した時、最初の頃自分が思った日本と全然違っていたり、或いは不思議に感じるところもいっぱいあったと思います。私も日本に対して、色々な驚いた事がありました。中でも一番驚いたのはホームレスの事です。

日本は世界でも有数の経済、文化や交通が発達している国です。人々の生活水準もとても高い国だと思います。このような先進国であるにもかかわらず、ホームレスというような人が存在しています。しかも、公園に行ったら、あっちこっちにいます。日本人の友達の話によると、ここ数年ホームレスが急激に増えているそうです。

最初日本に来た頃、テレビをつけたら、ただ人を殺してみたいというような少年による殺人事件や会社の倒産或いはリストラで自殺する事件など

いろいろな事件を放映していました。どうしてこの国では精神的に弱い人、考えることが変わって人が多いのだろうと思ってとても怖かったです。それで、ホームレスのような人を見たら、大回りしてホームレスの前を通らないようにしていました。ホームレスの人は何を考えているかよく分からなくて、見るたびに怖がっていました。

しかし、ホームレスってどんな人なんでしょうか？ そのような呼び名の人がいるわけではありません。ある人が置かれた状態を示すに過ぎません。辞書を引いてみたら、住む家のない路上生活者と書いてありました。路上生活者って文字通りに路上だけで生活しているわけではないと思います。当たり前のことですが、誰でも、生まれながらにして路上生活をしてきた人はいるはずがありません。結果的に路上生活に至るまで、必ずそれぞれの生活の歴史があると思います。私はとてもその原因を知りたくて、インターネットを通じていろいろ調べました。インターネットを開いてみたら、いろいろ書いてあります。たとえば、親子や夫婦関係をめぐるトラブルによって起こった家庭崩壊により家族と離れて関係を取り戻さずかけをつかめないままになってしまった人、または出稼ぎで大都市に着いたが、不況などの原因で職を失い、そのまま家族と会えなくなってしまった人、競争社会から脱落し、社会的なストレスを抱えた人、またそれらを背景としたアルコール、ギャンブル依存症など、目には見えにくいけれど具体的な生活困難を抱えてしまった人など、いろいろあります。しかも、ホームレスの中には、中小企業の元社長もいれば、元教師や修行僧もいます。いろいろな人がいます。

私の家の近くにも公園があります。そこにもたくさんホームレスが住んでいます。このように彼らがホームレスになった原因をいろいろ知ってから、前ほど怖くなくなりました。今は普通にホームレスの前を通ることができるようになりました。それだけでなく、以前より心の距離が近くなり、ホームレスの人が現実の社会に対して、あきらめずに元気で生きて行ってほしいと思うようにまで

なりました。

人間は生きている間、社会と関係なく、誰もがずっと自分の思った通りに生きていけるわけではありません。ホームレスの人はもちろん人によって様々な大変な経験や過去があると思うけれど、生活にあきらめてホームレスになるのは、ちょっと弱すぎるんじゃないかなと思います。人生はどんな困難なことが起こっても、最後まで前向きに頑張るべきだと思います。

ホームレスになった人たちの弱い心を考えたら、つい私たち留学生のことも頭に浮かんできました。私たち留学生もふるさとを離れて、外国で留学しているうちに、みんな言葉で言えないぐらい沢山の困難なことを抱えていると思います。それでも、みんな自分たちの夢をかなえるために、いろんな困難と戦って、あきらめずに前向きに頑張っているではありませんか。

留学生活は私にとっても、みんなにとっても、本当に人生の中でとても貴重な体験だと思います。ですから、これからもこの貴重な体験を無駄にしないで、どんな時でも、挫けずに素晴らしい未来に向かって挑戦する気持ちを持ち続けて行きたいと思います。

最後に、私が愛知大学に入学して、皆さんと知り合いに慣れたのも、何かの縁だと思います。この縁を大事にして、お互いに助け合い励ましあって頑張っていきたいと思います！

'02公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学談話会

〈後期〉 名古屋校舎研究館第3会議室

〈時間〉 14:30~16:30

⑥9月21日(土)

「EUにおける言語教育政策—ポーランドの外国語教育の現状—」

平尾 節子(法学部教授)

⑦10月12日(土)

「日本語話者がフランス語を通して見た韓国語・韓国語を通して見たフランス語(その2)」

田川 光照(経営学部教授)

⑧11月9日(土)

「メディア用語の変遷と最近の特徴」

大西 五郎(法学部教授)

⑨12月7日(土)

「トーマス・マンとはいったい何者だったのか」

島田 了(経営学部助教授)

⑩2003年1月11日(土) = 2 講義開催 =

「漢字について」

矢田 博士(経営学部助教授)

「漢字文化圏における表音文字の背景(その2)」

陶山 信男(愛知大学名誉教授)

〈編集後記〉

'02年7月号をお届けします。

次号より、内容のより一層の充実を目指して、各語系の先生方に、この半年あるいは1年間に外国の新聞などに掲載された言語・文化に関するニュースなどを提供していただくことになりました。お楽しみに!!